

プレスリリース 2021年3月30日
国際芸術祭「あいち」組織委員会

愛知県政記者クラブ
中部芸術文化記者クラブ 同時

国際芸術祭「あいち 2022」 企画概要

国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局
(愛知県県民文化局文化部文化芸術課国際芸術祭推進室内)
担当：小柳津(おやいづ)、都築、田中
県庁内線：724-690、724-682、724-680 代表：052-971-3111

開催概要

開催目的

- ・新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ・現代芸術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ・文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

名称

国際芸術祭「あいち 2022」

テーマ

STILL ALIVE

今、を生き抜くアートのちから

芸術監督

片岡 真実（森美術館館長、国際美術館会議(C I M A M)会長）

会期

2022年7月30日（土）～ 10月10日（月・祝） [73日間]

会場

愛知芸術文化センター ほか

事業展開

現代美術

- ・国内外のアーティストの作品展示などで、最先端の現代美術を紹介します。
- ・愛知県美術館を含む愛知芸術文化センターを中心として、県内での広域展開を図ります。

パフォーマンスアーツ

- ・国内外の先鋭的な演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術作品を、愛知芸術文化センターを中心に上演します。

ラーニング

- ・幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施します。

連携事業

- ・県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開します。
- ・参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内数か所で開催します。

オンライン展開

- ・会場での作品展示や上演等のほか、オンラインでの映像配信やプログラムなどを実施します。

主催

国際芸術祭「あいち」組織委員会

STILL ALIVE

今、を生き抜くアートのちから

ポストコロナの時代、いかに日常生活や社会経済活動を回復し、持続可能でより平等な世界を築いていくかは、全世界が直面する喫緊の課題です。2022年はこのパンデミックからの回復期にあたり、コロナが浮き彫りにした現代社会のあり方に対して、環境、政治、経済、文化といったあらゆる領域から新しい提言が求められる時期となるでしょう。見通しの立たない時間のなかで、その現実に向き合い、不確かさのなかから未来を生み出すことは、現代を生きるわれわれ全てに課せられた責務でもあります。

現代美術やパフォーマンスアートといった芸術は、その歴史を振り返っても、常に時代を反映し、真実を追究し、不確かさのなかから新しい価値観を提示してきました。90年代以降、欧米中心の価値観が多方向に分岐し、世界がさらに複雑化した今日では、多様な文化に対する理解や敬意を求める多様性（ダイバーシティ）や包摂性（インクルージョン）がますます重視されています。とりわけパンデミックが明らかにした社会構造の脆弱さはアーティストや芸術機関の活動にも多大な影響を及ぼしていますが、そのなかでも世界のアートコミュニティは差別や格差などの社会問題に対して連帯をもって立ち向かい、持続可能な世界の在り方を追究しています。

国際芸術祭「あいち2022」のテーマ「STILL ALIVE（いまだ生きている）」は、愛知県出身で世界的に評価されるコンセプチュアル・アーティスト河原温が、1970年代以降電報で自身の生存を発信し続けた「I AM STILL ALIVE」シリーズに着想を得ています。「あいち2022」は、この「STILL ALIVE」を多角的に解釈し、過去、現在、未来という時間軸を往来しながら、現代美術の源流を再訪すると同時に、類型化されてきた領域の狭間にも注目します。そして、芸術表現を通して不確かさや未知の世界、多様な価値観、圧倒的な美しさと出会い、そこからいかに理想的で持

続可能な未来を共に作りあげられるのかを考える機会となるでしょう。一方、コロナによって国境を跨ぐ活動が制限され、人々の意識は自身の拠って立つ地域へも向けられました。地方都市における芸術祭の特徴のひとつ、地域再発見という観点からは、愛知県の誇る歴史、地場産業、伝統文化などを視野に入れ、現代を起点にそれらはいかに蘇らせられるのかを探究しつつ、同時に世界各地のローカルをいかにグローバルに繋げていくのかという問いにも、クリエイティブに応答していくことになるでしょう。

「STILL ALIVE」を考えるために、以下のビジョンを掲げます。これらは独立して存在するものではなく、優劣の関係にも無く、相互に関連し、ときに相対しながら国際芸術祭「あいち2022」の全体を構成するものです。

過去から未来への時間軸を往来しながら「STILL ALIVE」を考える

100 年後の未来における地球や人間の存続を考える

現代世界を自然の営みや宇宙の法則といった大局的な視点から捉え、100年後、100年後の未来にも地球が美しく存続し、人類が平和に生きるための意識喚起や提案を重視します。環境問題やサステナビリティへの意識は、「あいち2022」の前身「あいちトリエンナーレ」が、2005年の愛知万博「愛・地球博」のレガシーとして創設された歴史を継承するものでもあります。

過去の多様な物語をいかに現代に蘇らせるのかを考える

地球の歴史、人類の歴史に光を当て、世界各地のローカルな文脈を現代に照らして再考します。愛知県は江戸時代までは尾張と三河という二つの国であり、そこでは戦国時代から安土桃山時代にかけて日本の統一に貢献した三英傑など数々の武将が輩出されています。歴史はしばしば正史とされる物語とそれ以外の多様な物語が、異なる視点から語り継がれるものです。「あいち2022」では世界の多様な物語を現代に蘇らせます。

現代を、この瞬間を、どう生き抜くのかを考える

2020年のパンデミックが引き起こした未曾有の健康危機、コロナ禍によって表面化した人種、ジェンダー、民族的な差異に対する差別や不平等などは、すべての人々の「命の重さ」を改めて考えさせることとなりました。自ら命を絶つ人々、なかでも女性と子供の自殺者数が増えていることも、日本社会が直面する大きな課題のひとつです。「あいち2022」では、「生きること」と芸術制作が強く結びついた力強い表現を通して、困難な時代の「生」について考えます。

現代美術の源流を再訪しつつ、類型化されてきた芸術分野の狭間に光を当てる

コンセプチュアル・アートの源流を再訪する

河原温が「I AM STILL ALIVE」シリーズを始めた1970年代は、作品の視覚的な表現よりもその概念や意味を重視する概念芸術（コンセプチュアル・アート）が花開いた時期です。この考え方は今日なお、世界の現代美術の底流をなしています。愛知県からは河原温、荒川修作など国際的に評価されたコンセプチュアル・アーティストが輩出されていますが、「あいち2022」では世界各地のコンセプチュアル・アートにも光を当てます。

伝統工芸、先住民の芸術表現などを現代美術の文脈から再考する

愛知県には地場産業、伝統工芸、食文化など固有の文化的伝統があります。海、山、川のある豊かな自然環境によって窯業や繊維業も発展してきました。近代以降、陶芸や染織などは「工芸」として「美術（ファインアート）」とは一線を画すものとされてきましたが、近年では多様な文化圏における近代美術の発展が再考され、工芸と美術を横断する表現、先住民の芸術表現なども再評価されています。「あいち2022」ではこうした芸術領域を固定概念から解放し、同時代に生きる表現として再考します。

言葉と記号による芸術表現を再考する

河原温は「I AM STILL ALIVE」シリーズの他にも、日付や起床時間など数字や言葉を使った作品を残しています。ソーシャルメディアが発達した現代社

会では短い言葉や記号によるコミュニケーションが広がっていますが、「あいち2022」では文字を使った美術表現やポエトリー（詩）の領域にも注目します。

身体表現や五感でアートを体感する

身体表現や五感で体感する表現などは、生きていることを直接的に実感させるものです。「あいち2022」では、現代美術とパフォーマンス・アーツという領域が共存してきたあいちトリエンナーレの歴史を踏襲しつつ、現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートに特に注目します。ここでも個々の領域の枠組みや空間にとらわれず、それぞれが有機的に融合するかたちを模索します。

生きることは学び続けること。未知の世界、多様な価値観、圧倒的な美しさと出会う

ラーニング・プログラムを通じて、体験や感動を未来に継承

初めて出会う現代美術作品は、しばしば難解であると言われるますが、それぞれの制作背景やアーティストの生きた時代や文化などのストーリーを学ぶことで、世界の遠い場所に住む人々や世代の異なる人々の感情や意識への共感にも繋がります。「あいち2022」では、さまざまなラーニング・プログラムを通して、作品をより深く理解し、国際芸術祭での体験や感動がみなさんの記憶に刻まれ、その先の人生に活かされる知恵や知識、精神の糧となるよう取り組みます。

美しさに心を動かす

詩人のウィリアム・ワーズワースは、空に虹を眺めるときに踊る心を唱いました。大人になっても、年齢を重ねてもそうでありたい、と。国際芸術祭「あいち2022」もまた、芸術の圧倒的な美しさに感動し、人生のどの一瞬にあっても明日を生きるためのポジティブなエネルギーに繋がる、心躍る出会いや体験の場になることを目指します。

国際芸術祭「あいち2022」芸術監督
片岡真実

企画体制

〈同じ肩書の場合は、姓のアルファベット順。[]内の役職名は2021年3月30日現在。〉

芸術監督

片岡 真実

Kataoka Mami



photo: Ito Akinori

[森美術館館長/国際美術館会議 (CIMAM) 会長]

ニッセイ基礎研究所都市開発部、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館。2020年より同館館長。

2007～2009年はヘイワード・ギャラリー（ロンドン）にて、インターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ（2012年）共同芸術監督、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督（2018年）。2014年から国際美術館会議（CIMAM）理事を務め、2020年より会長（～2022年）。

キュレトリアル・アドバイザー

コスミン・コスティナス

Cosmin Costinaș



photo: Trevor Yeung

[パラサイト エグゼクティブ・ディレクター/キュレーター]

2011年よりパラサイト（香港）のエグゼクティブ・ディレクター/キュレーター、2021年のカトマンズ・トリエンナーレ芸術監督も務める。過去には、ダカール・ビエンナーレ（2018年）やダッカ・アート・サミット（2018年）のゲスト・キュレーター、第10回上海ビエンナーレ（2014年）共同キュレーター、第1回ウラル・インダストリアル・ビエンナーレ（エカテリンブルグ、ロシア）共同キュレーター（2010年）、BAK（ユトレヒト、オランダ）キュレーター（2008-2011年）、『ドクメンタ12 Magazines』編集者（2005-2007年）を歴任。パラサイトでは、2015年の施設の大規模な拡張と新居地への移転を監督し、次のようなものを始め、多くの企画をキュレーションしてきた。「Koloa: Women, Art, and Technology」（Langafonua, Nuku'alofa, TongaとArtspace, Aucklandに巡回、2019-2021年）、「A beast, a god, and a line」（Dhaka Art Summitに巡回、Myanm/art & The Secretariat, Yangon、Museum of Modern Art in Warsaw, Kunsthall Trondheim, MAIAM, Chiang Maini巡回、2018-2021年）、「Is the Living Body the Last Thing Left Alive? The new performance turn, its histories and its institutions」（2014年）、「グレート・クレセント 1960年代のアートとアジェーション——日本、韓国、台湾」（森美術館、MUAC（メキシコシティ）に巡回、2013-2016年）、「A Journal of the Plague Year」（The Cube（台北）、Arko Art Center（ソウル）、Kadist & The Lab（サンフランシスコ）にて巡回、2013-2015年）。

ラーナ・デヴェンポート

Rhana Devenport



[南オーストラリア州立美術館館長]

2018年より南オーストラリア州立美術館（アデレード、オーストラリア）館長を務める。以前は、ニュージーランドのオークランド美術館（マオリ名：トイ・オ・タマキ）館長（2013-2018年）、ゴベット・ブリュースター美術館レン・ライ・センター館長（2006-2013年）を歴任。活動は美術館に留まらず、ビエンナーレやアートフェスティバルにも携わる。アジア・太平洋地域の現代アートを中心に、タイムベースト・メディアを用いた作品や、ソーシャル・プラクティス・アートに造詣が深い。これまでに、リー・ミンウェイ、ナリニ・マラニ、フィオナ・パディントン、リン・ティエンミャオ、ワン・ゴンシン、ジャン・ペイリー、ジュディス・ライトの個展を企画。ヴェネツィア・ビエンナーレのニュージーランド館にて「リサ・レイハナ：エミッサリーズ」（2017年）のキュレーターを務めたほか、シドニー・ビエンナーレ、シドニー・フェスティバル、アジア・パシフィック・トリエンナーレ（クイーンズランド州立美術館）においてシニア職に従事。2018年にニュージーランド・メリット勲章オフィサーを受勲。

マーティン・ゲルマン

Martin Germann

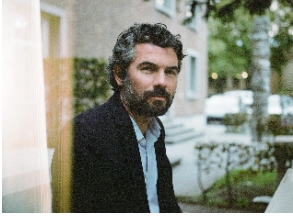


photo: Diana Tamane

[インディペンデント・キュレーター]

ドイツ・ケルン在住、キュレーター。「アナザーエナジー展」（2021年、森美術館、片岡真実との共同キュレーション）の他、「オリバー・ラリック展」（OCAT 上海館）、「ラウル・デ・カイザー展」（Mウッズ、北京）、「トーマス・ルフ展」（国立台湾美術館、台中）などの個展を企画。

2012年から2019年まで、アントワープ現代美術館（ベルギー）の芸術部門を率い、コレクションやテーマ別の展示のほか、ラウル・デ・カイザー、ジャン・ベイリー、ヒワ・K、ゲルハルト・リヒター、マイケル・E・スミス、ナイリー・バグラミアン、ジェームス・ウェリング、リー・キット、ミハエル・ブーテ、ジョーダン・ウルフソン、レイチェル・ハリソンなどの個展を企画。リリ・デュジュリー個展「Folds in time」（2015年）では、ベルギーの最優秀展覧会に贈られるAICA賞を受賞。過去には、ケストナー・ゲゼルシャフト（ハノーバー）やブエロ・フリードリヒのキュレーターを務め、ベルリン現代美術ビエンナーレにも参画。数多くの展覧会カタログやモノグラフを出版し、『Frieze』、『Mousse』、『032c』などのアート専門誌に寄稿。HISK（ヘント、ベルギー）で定期的に教鞭をとり、ブリュッセルのEtablissement d'en Faceのボードメンバーを務める。

ウンジー・ジュ

Eungie Joo



photo: Heinz Peter Knes

[サンフランシスコ近代美術館キュレーター]

サンフランシスコ近代美術館の現代美術キュレーター。最近では、グループ展「SOFT POWER」（2019-2020年）を企画し、社会の一員、市民としてのアーティストの役割に注目。安養パブリック・アート・プロジェクト/APAP 5（2016年、韓国）芸術監督、シャルジャ・ピエンナーレ12「The past, the present, the possible」（2015年、アラブ首長国連邦）キュレーター、イニョチン・インスティテュート（ブラジル）芸術文化プログラムディレクター（2012-2014年）などを歴任。2007年から2012年までは、ニューミュージアム（ニューヨーク）において、キース・ヘリング・ディレクター兼教育パブリックプログラムのキュレーターを務め、ニューミュージアム・トリエンナーレ「The Ungovernables」（2012年）の企画、「ミュージアム・アズ・ハブ」プログラム主宰、『Rethinking Contemporary Art and Multicultural Education』（2009年）の編集にも携わる。また、第53回ヴェネツィア・ピエンナーレ韓国館「濃縮-ヤン・ヘギュ」展（2009年）コミッショナー、REDCATギャラリー（ロサンゼルス）創設ディレクター及びキュレーター（2003-2007年）を務めた。

ガビ・ングゴ

Gabi Ngcobo



photo: Sabelo Mlangeni

[ジャベット・アート・センター キュレトリアル・ディレクター]

ヨハネスブルグ（南アフリカ共和国）を拠点とするアーティスト、キュレーター、エドゥケーター。2020年11月より、プレトリア大学ジャベット・アート・センター（Javett-UP）のキュレトリアル・ディレクターを務める。2000年代初頭より、南アフリカ国内外において芸術及び教育のプロジェクトに参画。最近のキュレーションには「All in a Day's Eye: The Politics of Innocence in the Javett Art Collection」（2020年、Javett-UP）、「Mating Birds」（KZNSAギャラリー、ダーバン）などがある。第10回ベルリン・ピエンナーレ「We don't need another hero」（2018年）キュレーター、第32回サンパウロ・ピエンナーレ（2016年）共同キュレーターも歴任。ヨハネスブルグを拠点とする共同プラットフォームであるNGO（Nothing Gets Organised）（2016年-）及び Center for Historical Reenactments（2010-2014年）の創設メンバー。ヴェネツィア・ピエンナーレ南アフリカ館「The Stronger We Become」（2019年）のカタログや、「Public Intimacy: Art and Other Ordinary Acts in South Africa」（2014年、サンフランシスコ近代美術館/YBCA）、「We Are Many: Art, the Political and Multiple Truths」（2019年、ヴェルビエ・アート・サミット）、『Texte Zur Kunst』（2017年9月号）に寄稿。

ヴィクトリア・ノーソーン

[ブエノスアイレス近代美術館館長]

Victoria Noorthoorn



photo: Federico Romero

2013年よりブエノスアイレス近代美術館（アルゼンチン）の館長を務める。近年、ブエノスアイレス近代美術館では彼女のリーダーシップのもと、展示スペースを倍増させ、主にアルゼンチンのアーティストに焦点を当てた74の展覧会を開催し、48の出版物をバイリンガルで発行。また、教育プログラムを拡大し、年7000人の教職員が参加。以前は、MoMAのドローイング・センター、ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館（MALBA）などを経て、インディペンデント・キュレーターとして第29回ポンテベドラ・ビエンナーレ（2006年）、第41回Salón Nacional de Artistas（カリ、2008年）、第7回メルコスール・ビエンナーレ（ポルト・アレグレ、2009年）、第11回リヨン・ビエンナーレ（2011年）などの国際展を企画。ブエノスアイレス近代美術館では、レオン・フェラーリ、マルタ・ミヌヒン、トマス・サラセノ、セルヒオ・デ・ローフ、アナ・ガラルド、ザネレ・ムホリ、トレイシー・ローズ、ラウラ・リマ、ベルナルド・オルティスなどの展覧会や、またブエノスアイレス近代美術館とフランクフルト現代美術館で展示された「A Tale of Two Worlds」（2017-2018年）などのグループ展を企画。2019年より国際美術館会議（CIMAM）の理事に就任。

トビアス・オストランダー

[インディペンデント・キュレーター]

Tobias Ostrander



メキシコシティ在住、キュレーター。マイアミ・ペレス美術館（PAMM）の前チーフ・キュレーター兼キュレーション担当副ディレクター（2011-2019年）を務めた。カリブ海地域のアーティスト、キュレーター、クリエイターのためのプラットフォーム「Tilting Axis」創設メンバー（2014-2019年）。エル・エコ実験美術館の館長（2009-2011年、メキシコシティ）、タマヨ美術館チーフ・キュレーター（2001-2009年、メキシコシティ）、inSITE2000 アソシエイトキュレーター（1999-2001年、サンディエゴ/ティファナ）、ニューミュージアムが主導する「ミュージアム・アズ・ハブ」の創設メンバー（2007-2012年）を歴任。その他、第24回サンパウロ・ビエンナーレ、エル・ムセオ・デル・バリオ、ブルックリン美術館にも携わる。

ラルフ・ルゴフ

[ハイワード・ギャラリー館長]

Ralph Rugoff



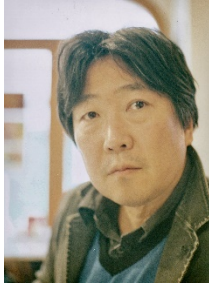
2006年よりハイワード・ギャラリー（ロンドン）の館長を務める。ハイワードでは、「Psycho Buildings」、「The Painting of Modern Life」、「The Infinite Mix」など数多くのグループ展のほか、エド・ルシェ、トレーシー・エミン、ジェレミー・デラー、カデル・アチアなどの個展を企画。リヨン・ビエンナーレ（2015年）のゲスト・キュレーター、第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2019年）芸術監督を歴任。渡英前は、カリフォルニア美術大学ワティス（Wattis Institute for Contemporary Art、サンフランシスコ）のディレクターを務め、トーマス・ヒルシュホルン、ロニ・ホーン、アン・ヴェロニカ・ジャンセンズ、マイク・ケリー、マイク・ネルソンなど数多くのアーティストの個展を企画。

デイヴィッド・ハモンズ、ポール・マッカーシー、リュック・タイマンス、ジャン＝リュック・ミレーヌ、映画監督のジャン・パンルヴェなど多数のアーティストについて、カタログや書籍に寄稿。米国のペニー・マッコール財団が主催するオードウェイ賞（批評・キュレーション部門）の初代受賞者（2005年）。

島袋 道浩

Shimabuku

[美術家]



1990年代初頭より世界中を旅しながら、そこに生きる人々の生活や新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンスやインスタレーション作品などを制作している。詩情とユーモアに溢れつつメタフォリカルに人々を触発するような作風は世界的な評価を得ている。近年はモナコ国立新美術館やクンストハーレ・ベルンなどで個展が開催される。ヴェネツィア・ビエンナーレ（2003、2017年）、サンパウロ・ビエンナーレ（2006年）、あいちトリエンナーレ2010、ハバナ・ビエンナーレ（2015年）、リヨン・ビエンナーレ（2017年）などに参加。Reborn Art Festival 2019（宮城）ではキュレーターも務める。

チーフ・キュレーター（学芸統括）

飯田 志保子

Iida Shihoko

[キュレーター]



photo: ToLoLo studio

東京都生まれ。名古屋市在住。1998年の開館準備期から11年間東京オペラシティアートギャラリーに勤務。2009年から2011年までプリズペンのクイーンズランド州立美術館／現代美術館内の研究機関に客員キュレーターとして在籍。韓国国立現代美術2011年度インターナショナル・フェローシップ・リサーチャー。アジア地域の現代美術、共同企画、芸術文化制度と社会の関心に関心を持ち、ソウル、豪州、ニューデリー、ジャカルタ各地域で共同企画を実践。第15回アジアン・アート・ビエンナーレ・バングラデシュ2012、あいちトリエンナーレ2013、札幌国際芸術祭2014キュレーター、あいちトリエンナーレ2019チーフ・キュレーター（学芸統括）を務めた他、2014年から2018年まで東京藝術大学准教授。国際美術館会議（CIMAM）、国際ビエンナーレ協会（IBA）会員、美術評論家連盟（AICA Japan）2021年度常任委員長。

キュレーター（現代美術）

中村 史子

Nakamura Fumiko

[愛知県美術館主任学芸員]



愛知県生まれ。東海圏から関西圏を拠点に活動。専門は視覚文化、写真、コンテンポラリーアート。2007年より愛知県美術館に勤務。美術館で担当した主な展覧会に「放課後のほらっぱ」（2009年）、「魔術/美術」（2012年）、「これからの写真」（2014年）がある。また、美術館では若手作家を個展形式で紹介するシリーズ「APMoA Project, ARCH」（2012-2017年）を立ち上げた他、2010年からあいちトリエンナーレに主会場のスタッフとして携わり、美術館活動と芸術祭の連携に取り組んできた。2015年より日本と東南アジアのキュレーターが協働で調査、展覧会企画を行う美術プロジェクト「Condition Report」（国際交流基金主催）に参加し、2017年にはタイのチェンマイにてグループ展「Play in the Flow」を企画、実施する。

堤 拓也

Tsutsumi Takuya



photo: Kai Maetani

[キュレーター/グラフィックデザイナー]

滋賀県生まれ。大津市在住。2011年旧京都造形芸術大学卒業後、2013年から2016年まで同大学付属施設ARTZONEディレクター兼キュレーター。同年よりポズナン芸術大学（ポーランド）にて1年間のレジデンスを経て、2019年アダム・ミツケヴィチ大学大学院修了（カルチュラルスタディーズ専攻）。主なキュレーション実績に「類比の鏡/The Analogical Mirrors」（滋賀、2020年）、「ISDRSI 磯人麗水」（兵庫、2020年）など。展覧会という限定された空間の立ち上げや印刷物の発行を目的としつつも、アーティストとの関わり方を限定せず、自身の役割の変容も含めた有機的な実践を行っている。2018年より共同アトリエ「山中suplex」プログラムディレクター。

パフォーミングアーツ・アドバイザー

藤井 明子

Fujii Akiko



[愛知県芸術劇場プロデューサー]

1992年より愛知県文化情報センター学芸員（音楽）、2016年より愛知県芸術劇場シニアプロデューサー兼チーフマネージャー。野村誠『プールの音楽会』（2010年）、小杉 武久「MUSIC EXPANDED #1、#2」（2016年）、三輪真弘+前田真二郎モノローグ・オペラ『新しい時代』再演（2017年）ほか、現代音楽、民族音楽、ジャンルにとらわれないミュージシャンや作曲家に焦点を当てたコンサートや映像、ダンスとのコラボレーション公演の企画・制作を行う。あいちトリエンナーレ2010、2013、2016パフォーミングアーツ・プロデューサー、キュレーターを務めた。

前田 圭蔵

Maeda Keizo



photo: Ryuji Miyamoto

[アートプロデューサー]

多摩美術大学芸術学科卒。世田谷美術館学芸課に勤務後、株式会社カンパセーション&カムパニーで、音楽やパフォーミングアーツの企画制作や、レコード・レーベル運営等を手掛ける。また、2001年より、ウェブサイト・マガジン『realtokyo』の編集／運営に携わる。2005年に愛知県で開催された日本国際博覧会では、複数の国際プロジェクトを担当。フェスティバル/トーキョー2011制作アドバイザー、あいちトリエンナーレ2013パフォーミングアーツ部門プロデューサー、六本木アートナイト2014プログラムディレクターなどを歴任。また、2012年以降は、公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場のスタッフとして、国内外のパフォーミングアーツの企画制作等に携わっている。

キュレーター（パフォーミングアーツ）

相馬 千秋

Soma Chiaki



photo: Yurika Kawano

[アートプロデューサー/NPO 法人芸術公社代表理事]

フェスティバル/トーキョー初代プログラム・ディレクター（2009-13年）、
「急な坂スタジオ」初代ディレクター（2006-10年）等を経て、2014年に
NPO 法人芸術公社を設立。国内外で舞台芸術、現代美術、社会関与型芸術を
横断するプロデュースやキュレーションを多数行う。2015年フランス共和国
芸術文化勲章シュヴァリエ受章。立教大学特任准教授（2016-21）。あいち
トリエンナーレ 2019 キュレーター。2017年より「シアター commons」実行
委員長兼ディレクター。令和2年度（第71回）芸術選奨（芸術振興部門・
新人賞）受賞。

キュレーター（ラーニング）

会田 大也

Aida Daiya



[山口情報芸術センター（YCAM）アーティスティック・ディレクター]

2003年開館当初より11年間、山口情報芸術センター（YCAM）の教育普及担
当として、メディアリテラシー教育と美術教育の領域にまたがるオリジナル
ワークショップや教育コンテンツの開発と実施を担当する。2014年より東京
大学大学院ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブ・リーダー[GCL]育成
プログラム特任助教。あいちトリエンナーレ 2019 ラーニング・キュレーター
を経て、2021年現在、YCAM 学芸普及課長を務める。

山本 高之

Yamamoto Takayuki



photo: Kato Hajime

[アーティスト/スクール・イン・プログレス・コディレクター/
オンゴーイング・スクール・ディレクター]

愛知県生まれ。子どもの会話や遊びに潜在する創造的な感性を通じて、普段は
意識することのない制度や慣習の特殊性や個人と社会の関係性を描き出してき
た。近年は地域コミュニティと協働して実施するプロジェクトや、一般を対象
としたオルタナティブなアートスクール・プログラムにも取り組んでいる。
これまでに第6回シャルジャ・ピエンナーレ（シャルジャ・アートセンター、
2003年）、「笑い展：現代アートに見る『おかしみ』の事情」（森美術館、
2007年）、あいちトリエンナーレ 2010（旧石田ビル、2010年）、「アジア
の亡霊」（アジア美術館、サンフランシスコ、2012年）、「ゴー・ビトゥーン
ズ展：こどもを通して見る世界」（森美術館ほか、2014-2015年）、第3回
コチ＝ムジリス・ピエンナーレ（アスピン・ウォール、2016年）などに参加。
2017年にはアートラボあいちにて個展「山本高之 Children of men」を開催。